



美術の流れ 鑑賞ガイド

1 印象派

19世紀後半のパリ、伝統的な主題と表現手法を拒絶し、新たな絵画を探求する画家たちがいました。1874年に彼らは権威あるサロン（官展）に対抗すべく、自分たちで展覧会を開催しました。その際に受けた皮肉まじりの批評をもとに、この画家たちは印象派として知られるようになります。印象派の画家たちは、屋外の自然風景や都市の景観、日常生活の光景などを好んで主題に選びました。そして、なるべく絵具を混ぜ合わせずに、原色に近い色を画面上に並べる色彩分割の手法を、軽やかなタッチとともに用いて描きました。それによって、光の輝きや明るさ、空気感を表現しようとしたのです。この章でご紹介するルノワールやカイユボットの作品には、そのような鮮やかな色彩や、絵具を編み込むような筆遣いといった印象派特有の表現が見られます。

2 新印象派

1884年、因習的なサロン（官展）に不満を抱いた画家たちは、無審査で作品を発表できる場として最初のアンデパンダン展を開催しました。彼らの中には、後に新印象派の主要なメンバーとなるスーラやシニャック、クロスなどがありました。新印象派の画家たちは、印象派の色彩分割を基に、色彩と光を扱う科学的理論を取り入れました。そして光の表現を探究する中で、細かな点で画面全体を均一に覆う点描表現と、色彩の対比による視覚的效果を組み合わせました。この分割主義と呼ばれる手法は、平面性を強調し、奥行きを表現を手放すことにもつながりました。新印象主義は、パリのアンデパンダン展、そしてベルギーのブリュッセルで設立された20人会展を主な活動拠点として、国際的に展開しました。またファン・ゴッホやゴーギャン、ナビ派などの他の絵画動向と交わることで、新印象派の画家たちは科学的理論を厳密に応用するという制約を超えて、より大胆なタッチと色彩表現を探究していきました。

3 ナビ派とポン＝タヴァン派

ポン＝タヴァンは、フランス北西部のブルターニュ地方に位置する小さな村です。ここに滞在したゴーギャンとその周りにいた若い画家たちをポン＝タヴァン派と呼びます。彼らは伝統的な絵画表現からも同時代の印象主義からも距離をとり、輪郭線で色面を囲む平面的な表現方法を用いて、自身の想像力と描かれるものの外観を統合しようと試みました。その影響を受けたパリの若手画家たちは、ナビ（ヘブライ語で「預言者」の意味）派を結成しました。彼らは19世紀末の象徴主義の流れに属し、現実をそのままに描くのではなく、装飾的な表現を追求しました。また、神秘主義や宗教、文学に関連した内容を好み、日常生活の一場面を描く際にも、知的、精神的な内容を織り込むことが多くありました。ナビ派の理論家として知られ、宗教に強い関心を抱いたドニにとって、重要な主題は妻と子どもたちでした。ドニはブルターニュ地方のペロス＝ギレックに別荘をもち、その邸宅や近くの海岸で憩う家族の姿を描きました。



オーギュスト・ルノワール《詩人アリス・ヴァリエール＝メルツバッハの肖像》1913年 油彩、カンヴァス 92×73cm ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

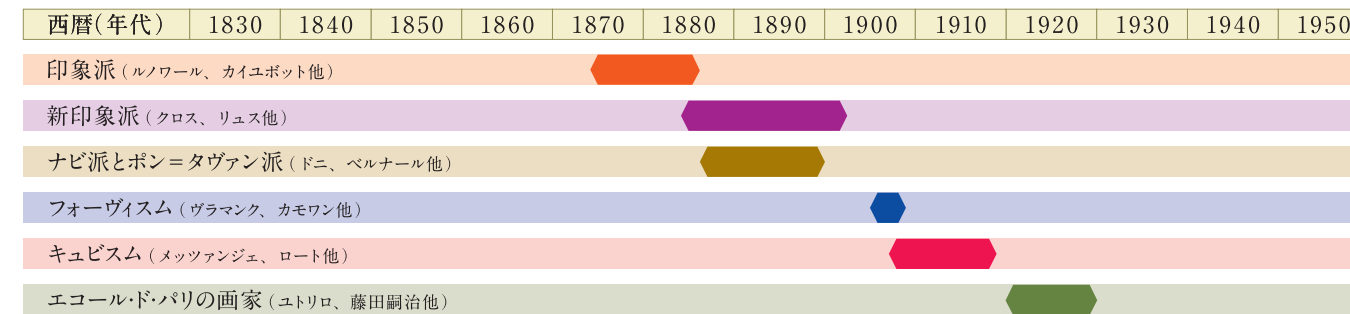


アンリ＝エドモン・クロス《糸杉のノクチュール》1896年 油彩、カンヴァス 65×92cm ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE



モーリス・ドニ《休暇中の宿題》1906年 油彩、カンヴァス 94×73cm ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

《主な活動期間》



4 新印象派からフォーヴィスムまで

新印象派の画家たちは、厳格な分割主義の原理から次第に遠ざかり、細かい点描に代わる長めのタッチや自由な色彩表現を取り入れました。この表現の幅の広がりから、のちのフォーヴィスムや表現主義に向かう動きが展開します。1905年、パリで開催されたサロン・ドートンヌでは、一群の若い画家たちによる絵画がセンセーションを巻き起こしました。大胆なタッチと鮮やかな色彩を特徴とする彼らの作品が「野獣（フォーヴ）」と批評されたことから、フォーヴィスムという呼称が生まれました。フォーヴィスムの主要な画家たちの中で、象徴主義の画家に学んだマティスやカモワらは新印象派の分割主義に感化され、さらなる実験的表現を模索しました。一方、パリ郊外の街シャトーで活動したドランとヴラマンクは、ファン・ゴッホやゴーギャンらの重々しい色彩と激しい筆遣いを受け継ぎました。フォーヴィスムは数年間の活動の後に終焉を迎え、画家たちはそれぞれ独自の道を歩むようになります。

5 フォーヴィスムからキュビスムまで

フォーヴィスム最後の展覧会とされる1907年秋のサロン・ドートンヌでは、セザンヌの回顧展も併せて開催されました。これがきっかけのひとつとなり、画家たちの関心は色彩から、空間と量感の表現へと移っていきました。キュビスムを牽引したピカソらの画家たちは、複数の視点から対象物を捉え、そのイメージを組み合わせることで、現実を絵画上に再構築することを試みました。分析的キュビスムの時期（1910-1912）には、モチーフの形体は多くの面に分解され、色彩は黒や灰色、白などに限定されました。そして次第にモチーフと周囲の空間との境目は曖昧となり、やがて溶解していきました。総合的キュビスムの時期（1912-1915）には、モチーフの形体と色彩が復活し、壁紙や新聞の切り抜きを貼り付けて、絵画に現実の要素を導入する試みが行われました。その後に現れた古典に立ち返ろうとする芸術的気運や、文学など他の芸術分野との関連を通して、キュビスムはさらに多様な展開を示すことになりました。

6 ポスト印象派とエコール・ド・パリ

19世紀後半から20世紀初めにかけてのパリでは、印象主義を始めとする前衛芸術が多様な展開を見せた一方で、それらから距離をおいた画家たちもいました。特に両大戦間の時期を中心に、パリで活動したフランス国内外出身の芸術家たちの中で、特定の芸術運動に属さず、明確な芸術上の主義や信条を立てない画家たちを総称してエコール・ド・パリと呼びます。第一次世界大戦前にはモンマルトルが、戦後にはモンパルナスが若手芸術家たちの主な拠点になりました。彼らの多くは、貧しい人々や労働者、庶民に共感し、その日常生活を描きました。エコール・ド・パリの画家たちが主に活動した1920年代には、装飾芸術の重要性が目ざされるとともに、古典絵画に立ち返ろうとする「秩序への回帰」と呼ばれる傾向がありました。画家たちは、そのような同時代の芸術思潮から影響を受けつつ、複数の絵画様式を融合させるなどの試みを通して、それぞれ独自の絵画表現を探究していきました。

テオフィル＝アレクサンドル・スタンラン《猫と一緒にの子》1885年 油彩、カンヴァス 90×58.5cm ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE



アンリ・マンギャン《室内の裸婦》1905年 油彩、カンヴァス 73×60cm ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE



ジャン・メッツァンジェ《スフィンクス》1920年 油彩、カンヴァス 116×89cm ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE



出品作家一覧

	西暦(年代)	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980
第1章 印象派	生没年																
●1874 第1回「印象派展」~1886 第8回「印象派展」(最終回) ●1914~1918 第一次世界大戦																	
アンリ・ファンタン=ラトゥール	1836-1904	1836							1904								
オーギュスト・ルノワール	1841-1919		1841							1919							
アルマン・ギョーマン	1841-1927		1841								1927						
ギュスターヴ・カイユボット	1848-1894		1848					1894									
第2章 新印象派																	
●1884 アンデパンダン展創設 ●1903 サロン・ドートンヌ創設 ●1886頃 新印象主義の始まり																	
アルベール・デュボワ=ピエ	1846-1890		1846					1890									
シャルル・アングラン	1854-1926			1854							1926						
アンリ=エドモン・クロス	1856-1910			1856						1910							
マクシミリアン・リュス	1858-1941			1858										1941			
アシル・ロージェ	1861-1944				1861									1944			
テオ・ファン・レイセルベルヘ	1862-1926				1862						1926						
ジョルジュ・レメン	1865-1916				1865					1916							
ニコラス・アレクサンドロヴィッチ・タルコフ	1871-1930					1871						1930					
第3章 ナビ派とボン=タヴァン派																	
●1888頃 ナビ派結成																	
ポール=エリー・ランソン	1864-1909				1864				1909								
エミール・ベルナール	1868-1941				1868									1941			
モーリス・ドニ	1870-1943					1870								1943			
第4章 新印象派からフォーヴィスムまで																	
●1905 フォーヴィスムの始まり:第3回サロン・ドートンヌ																	
ルイ・ヴァルタ	1869-1952				1869									1952			
アンリ・マンギャン	1874-1949					1874							1949				
モーリス・ド・ヴラマンク	1876-1958					1876								1958			
ジャン・ピュイ	1876-1960					1876									1960		
ラウル・デュフィ	1877-1953					1877								1953			
キース・ヴァン・ドンゲン	1877-1968					1877									1968		
シャルル・カモワン	1879-1965					1879									1965		
第5章 フォーヴィスムからキュビスムまで																	
●1907頃 キュビスムの始まり:ピカソ《アヴィニョンの娘たち》(1907)、第5回サロン・ドートンヌでのセザンヌ回顧展(1907) ●1912 セクシオン・ドール展																	
ジャンス・リジールソー	1870-1956					1870								1956			
マリア・ブランシャール	1881-1932						1881				1932						
アルベール・グレーズ	1881-1953						1881							1953			
ジャン・メッツァンジェ	1883-1956						1883							1956			
アンリ・エダン	1883-1970						1883									1970	
アンドレ・ロート	1885-1962						1885								1962		
ロジェ・ビシエール	1886-1964						1886								1964		
マレヅナ	1892-1984							1892									1984
第6章 ポスト印象派とエコール・ド・パリ																	
●1939~1945 第二次世界大戦																	
テオフィル=アレクサンドル・スタンラン	1859-1923			1859							1923						
フェリックス・ヴァロットン	1865-1925				1865						1925						
シュザンヌ・ヴァラドン	1865-1938				1865							1938					
ジョルジュ・ボッティエニ	1874-1907					1874			1907								
アンドレ・ドラク	1880-1954						1880							1954			
モーリス・ユトリロ	1883-1955						1883							1955			
藤田嗣治	1886-1968						1886								1968		
モイズ・キスリング	1891-1953							1891						1953			